

自然の保全と持続可能な利用を両立するために「生態系ネットワーク」を。

経済的な効率を高め、豊かな暮らしを得るために行ってきたことが、時に自然の持つ再生力を超え、生きものの生息・生育空間の消失につながってきました。これに対して、経済との両立を図りながら、**効果的に生きものの生息・生育空間を守り、再生し、創出していくために考え出された方法がく生態系ネットワークの形成<です。**

「生態系ネットワーク」の基本的な考え方は、生きものの生息・生育地を「コアエリア」として保全・再生すると同時に、これらを帯状や飛び石状に連なる自然空間である「コリドー（回廊・通り道）」によってつなぐことによって、生きものが移動できるようにするものです。

例えば、アカガエルが暮らす水辺や森は「コアエリア」に、移動する草地などの経路は「コリドー」にあたります。また、トンボが繁殖する池は「コアエリア」に、トンボが餌となる虫を捕食しながら飛んでいく通り道は「コリドー」にあたります。森や水辺といった自然を、公園や学校の緑地、街路樹、企業や住宅の植栽などで結びつけることによって、地域全体で生物多様性を取り戻していく、これが「生態系ネットワーク」です。

県全体で「生態系ネットワーク」を形成するためには、様々な取り組みの蓄積が必要です。個々の取り組みを効果的なものとするためには、県全体の「生態系ネットワーク」を意識しながら、自らの取り組みが果たす役割を認識して活動していただくことが大切です。

あいちに残された、奥山から沿岸域に至る多様な自然環境を有機的につなぎ、経済活動との両立を図りながら生物多様性をより豊かなものとしていくために、「あいち自然環境保全戦略」では「生態系ネットワークの形成」を主要な取り組みとしています。

あいちの生物多様性ポテンシャル 気づく・まもる・つなげるマップについて

「あいちの生物多様性ポテンシャル 気づく・まもる・つなげるマップ」には「生態系ネットワーク」において大切と考えられる場所が示されています。様々な方がこのマップを見て、生態系ネットワークについて考え、協力して取り組んでいただくことによって、これまで個々に行われてきた取り組みが一定の方向に向かい、より高い効果が発揮されることを目指しています。

普段は生きものや自然にあまりなじみのない方でも、このマップを眺めているだけで、ご自分の家や学校、職場の周りなど身近な場所に様々な生きものがある可能性があることを実感できると思います。

そして、地域で暮らし、働き、学ぶ皆さんが、住民、NPO、企業、学校、自治体などといったそれぞれの立場から、協力して「生態系ネットワーク」を実現し、生物多様性の保全と再生に取り組んでいただきたいと思います。

生態系ネットワークの形成は、**あいち固有の自然を取り戻すと同時に、あいちの自然と人が育んできた原風景を取り戻し、地域への愛着を高めることでもあるのです。**

このマップの使い方

家庭や学校、工場、事業所、公共施設などでのピオトープづくりや自然再生、公共工事などの各種事業、環境保全型農林業、自然を守る計画づくりなどで、このマップを見て、「生態系ネットワーク」をつくる方法を考えてみてください。

ピオトープをつくる際に、あるいは植樹しようとする際に、そのピオトープや緑地が、より広い自然のネットワークの中でどのような役割を果たす場所となるのか考えてください。多くの生きものは、ひとつの場所だけで生きていくのではなく、周りの自然との関わりの中で生きているのです。

周囲の自然との関わり、保全・再生の積み重ねが、将来の世代に自然の恵みを受けることのできる持続可能な県土を手渡すことにつながっていくはずですよ。

なお、生態系ネットワークの目標は、生物多様性の保全・再生の状況を反映しながら定期的に見直すものとして。それとともに本マップも改訂・充実させていく予定です。

マップのタイトル「気づく・まもる・つなげる」には次の意味があります。

気づく



まずはマップを眺めてみてください。あなたが暮らす（働く、学ぶ）地域にはどんな生きものが生きているのか、今は生きものがいなくても、ひとが手を貸せば生きものが生きる場所に変えられることに気づいてください。

まもる



生きものにとって大切な場所を知り、その場所と、そこに生息・生育する生きものを守るために何ができるのか考えてください。地域でできることはありませんか。職場や学校でできることはありませんか。工事を行うときに工夫できることはありませんか。

つなげる



生態系ネットワークを作っていくために、大切と考えられる場所を知り、つなげる方法を考えてください。今は生きものがいなくても、配慮によって生息・生育できる場所に変えたり、身近な自然をより豊かなものに変えていくことができます。

さらに、その場所と他の場所をつなげることによって、あいちの自然全体をより豊かなものにしてください。かつて、この場所にあった原風景を取り戻し、未来の子どもたちへと受け継いでいってください。

生態系ネットワークについて

野生生物の多くは、一つのタイプの生息空間で一生涯を終結しているわけではなく、採食・休息・繁殖、あるいは一日、一年、一生涯を通じて複数の異なるタイプの生息空間を利用しています。たとえば、ニホンアカガエルは、卵・オタマジャクシの時は、田んぼや湿地などの浅い水域、子ガエルは草地、親ガエルは林で生活しています（右図参照）。マガモの仲間は、ねぐらとなる池沼と食物をとる草地や農地の間を毎日移動しています。



また、ある生物の集団が孤立すると遺伝的な多様性が失われてしまうため、他の集団との繁殖交流をするために、移動できる範囲内に同じタイプの生息・生育空間が複数存在していることが必要です。さらに、ある生物の生息・生育空間がなくなってしまった場合でも、その生物が移動できる範囲内に同じタイプの生息・生育空間があれば、その地域から絶滅する危険を減らすことができます。

このように、生物多様性を守っていくためには、同じタイプの環境や、異なるタイプの環境がネットワークされていることが必要です。これを「生態系ネットワーク」と呼びます。

「生態系ネットワーク」を検討するうえで参考となる、効果的な生物生息空間の配置のしかたとして、次の考え方が知られています。

生物の生息空間の効果的な配置のしかた

優	劣	
		なるべく広いほうがよい
		同面積ならひとつにまとめたほうがよい
		分割する場合には、分散させないほうがよい。
		線状に集合させるより、等間隔に集合させたほうがよい
		生態的回廊(コリドー)でつなげたほうがよい
		できるだけ丸いほうがよい

Diamond, J. M. 1975 より作成

これを参考にして、考えられたのが「生態系ネットワーク」形成の基本的な考え方です。

まず、生物の生息・生育空間となる「コアエリア」（本マップでは、大型哺乳類や猛禽類などの生息空間となる規模の大きなものを【大拠点】それ以外を【拠点】と区分して呼びます）をできるだけ広い面積で保全・再生することによって生物が安定的に生息・生育できる環境を確保します。これを帯状や飛び石状の自然地である「コリドー」（本マップでは【回廊】と呼びます）でつなぐことにより生物が移動できるようにします。また、「コアエリア」と「コリドー」の周辺に広がる区域は「マトリックス」（本マップでは【基盤環境】と呼びます）として、自然の質の向上を図る（たとえば、スギ・ヒノキの単純林を広葉樹が混交する林に転換する、住宅地の樹木を増やすなど）ことによって、生態系ネットワークの形成を助けるようにします。

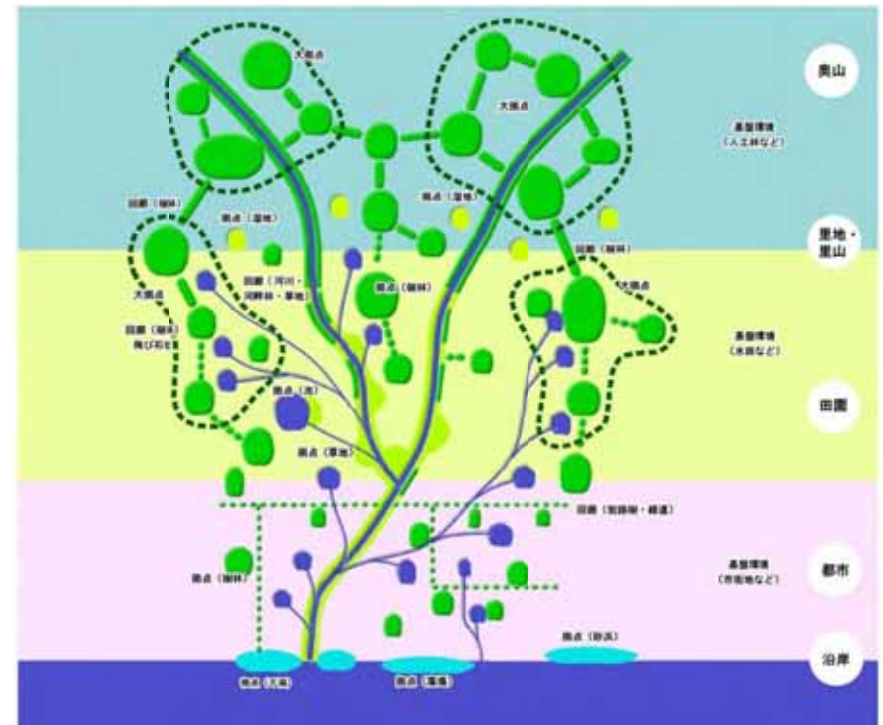
以上が「生態系ネットワーク」形成の基本的な考え方ですが、前述のように、生物の種類によっては、異なる環境を移動しているものや、飛翔するために「コリドー」を必要としないものもいます。

したがって、「生態系ネットワーク」を考える場合には、単純に「コアエリア」を「コリドー」で結ぶのではなく、生物の生態を考えうえで、ネットワークの方法を考える必要があります。

生態系ネットワークの構成要素

大拠点 (コアエリア)	・食物となる生物が多い質の高い自然と広い生息空間が必要とされる大型哺乳類（ツキノワグマ）や猛禽類（クマタカ・オオタカ・サシバなど）の生息地
拠点 (コアエリア)	・動植物の安定的な生息・生育地 ・希少種などが集中して分布する場所
回廊 (コリドー)	・大拠点や拠点をつなぎ、生物の移動や遺伝子の交流を可能とする生態的な経路 ・帯状のものほか、飛び石状のものがある
基盤環境 (マトリックス)	・大拠点、拠点、回廊の周辺域に広がる環境 ・大拠点、拠点、回廊の緩衝区域や地域全体における自然の質の向上を図る役割を持つ

※大拠点の中には、拠点そのものの面積が広いものだけでなく、いくつかの拠点が回廊で有機的につながった構造になっているものもあります。



生態系ネットワークの構成要素（大拠点・拠点・回廊・基盤環境）の配置イメージ

※本図をベースに作成した生態系ネットワークの形成イメージは6ページをご覧ください。